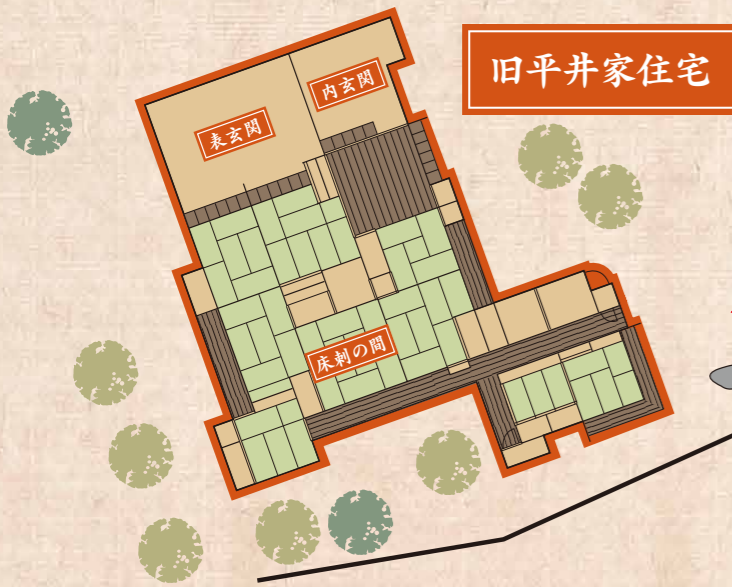


施設内見取り図



旧平井家住宅 ■大分県指定有形文化財

旧平井家住宅は安政6年（1859年）に建てられたとみられる武士住宅です。江戸時代には、上級藩士である稲葉家（禄高200石）の居宅として使用されていました。

建物の特徴としては、「表玄関」（客人用）、「内玄関」（家人用）に分けられた玄関や、天井の棧が床の間に直交する「床刺しの間」が挙げられます。



隣接施設のご案内

荘田平五郎記念子ども図書館 ■国登録有形文化財

この建物は、大正7年（1918年）、三菱財閥の大番頭といわれた荘田平五郎の寄付によって創設された「財団法人臼杵図書館」本館にあたる建物です。現在は、子ども図書館として利用されています。また、同時期に建設された文庫と共に国の登録有形文化財になっています。

荘田平五郎は、弘化4年（1847年）、臼杵藩儒学者荘田允命の長男として生まれました。幼少の頃より秀才の誉れ高く、慶應義塾卒業後、三菱に入りました。その後、最高経営陣の一人である「管事」となり、三菱拡大を支えました。

図書館は昭和22年、旧臼杵町に移管され、昭和45年（1971年）に現在の本館が開館した後は、旧本館は民俗資料館として活用されてきました。しかし、傷みが激しくなったため改修を行い、平成15年（2003年）4月1日、荘田平五郎記念子ども図書館として再開館されました。内装は子ども図書館としての改修を行いました。入母屋造りの屋根、焼き板の外壁、図書館の「圖」（図の旧字体）の字を配した意匠が用いられた鬼瓦などの外装は、当時のままです。

大正当時の木造図書館建築として現在も供用されている建築は極めてまれです。

臼杵市立臼杵図書館文庫 ■国登録有形文化財（内部非公開）

この建物は、「財団法人臼杵図書館」本館と共に建てられたものです。内部は3階建ての土蔵づくりを基本としながら、窓には「鉄骨ガラス窓」（鉄骨ガラス窓）を用い、出入り口も鉄製扉を使用するなど、当時としては堅牢な造りを追求しています。

開館後は、稲葉家をはじめ、地元有志から多数の書籍が寄贈され、この文庫に収められました。



離れ棟(西の間・大西の間)



大西の間

昭和17年以降に増築された建物でしたが、主屋との繋ぎ目部分が双方の建物の劣化の要因となっていたこともあり、平成21年度からの大規模改修により離れ棟として整備しました。主に貸館利用として、読み聞かせや学習室等で、隣接する荘田平五郎記念子ども図書館、臼杵図書館と一体となった利用やお茶（野点）などの文化活動の教室、また地域のコミュニティ活動施設として有料で開放しています。（事前申請が必要です。）

※営利目的に繋がる利用については利用許可できませんのでご了承ください。

貸館利用料：1時間あたり 各310円（準備や片付けの時間も含まれます。）



西の間

大書院

■国登録有形文化財

最初に客を迎え入れる「表」空間としての機能を有する建物です。上の間には長押が回されたり、格式を重視する武家住宅の特徴を残しています。一時期、料亭として利用されていましたが、外観を活かす形の活用であったため、全体的な構造に大きな変化はなく、旧大名の格式を今に伝える規模の大きな書院です。



御居間棟・台所棟

■国登録有形文化財



いわゆる「奥」空間の中核になる建物です。稲葉家当主の滞在時は、通常御居間棟で起居していたと考えられます。「居間」は当主の御座所として使用されていたと考えられ、床の間や長押等が武家の格式を伝えています。土間の吹き抜けも、かまどの煙で屋根裏をいぶすための工夫の一つです。

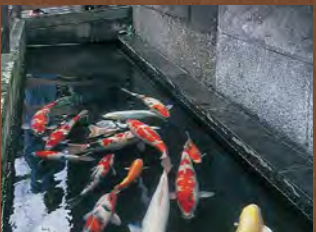


土蔵・御門・外塀・東門

■国登録有形文化財

土蔵は、一時稲葉家の重要な資料を収めていたといわれ、その一部は国登録文化財となっています。現在、敷地内では cafe 凡と凜で食事を conce 下屋敷では臼杵にちなんだみやげ品を取り揃えています。（有料）

外塀は、別邸完成当初から「下見板張り」の姿を受け継いでいて、土塀の支柱と基礎部分には、地元産と見られる「灰石（阿蘇溶結凝灰岩）」が用いられています。特に基礎部分の石積は全高の3分の1を占め、独特の意匠を凝らしています。外塀と御門・東門は一体となって、別邸とその周囲の景観を形成しています。



土蔵



元々ここにあった蔵が別の場所へ移築されていましたが、再移築されました。1階部分は、市内の観光パンフレットの配置したカウンターを、2階部分には、臼杵図書館を寄贈された荘田平五郎を紹介するパネルを展示したギャラリースペースとして開放しています。